
高橋 裕美 (たかはし ひろみ)



【書名】 坊っちゃん
【著者】 夏目漱石
【発行】 新潮社 (新潮文庫)

小学6年生のときに『吾輩は猫である』の続編を書いたことがあります。将来、漱石のような文章が書けるようになりたいと、とんでもない憧れを抱いたものです。東京出身の私は、広島に赴任中『坊っちゃん』を7回くらい読み返しては、笑い転げていました。小説の舞台である松山の人々は、この作品が大嫌いということですが、私も年齢と経験を重ねるごとにその気持ちを理解することができるようになりました。現代の若者がこの作品について、どのような感想をもつのか、大変興味があります。

【書名】 藪の中
【著者】 芥川龍之介
【発行】 講談社 (講談社文庫)

「真実は永遠に藪の中」は、最近では日常で使うことはない言葉かもしれませんが。小説の中では、ある殺人事件の当事者3人の証言(ひとつは霊能者を介した被害者のもの)が全く食い違っていて、真相は解き明かされることはありません。この真相究明に関して、たくさんの研究がなされているそうです。私の感想は、物事をみる視点や解釈は一人ひとり異なるものなので、係争の解決はとても難しいということを教えてくれる優れた作品というものです。この小説を原作とした映画に黒澤明監督の『羅生門』や中野裕之監督の『TAJOMARU』があります。『羅生門』は、ポール・ニューマン主演で『暴行』という映画にリメイクされています。若い皆さんには当然、小栗旬の多襄丸が親しみやすいと思われます。私はニューマンも大好きですが、三船敏郎のざらざらした盗賊ぶりに軍配を上げます。

【書名】新装版 苦海浄土

【著者】石牟礼道子

【発行】講談社（講談社文庫）

日本の高度成長期に熊本県水俣市で発生した公害、水俣病（工場から排出された有機水銀による中毒性中枢神経疾患）については、皆さんもこれまでに学習されたことがあると思います。著者の石牟礼道子氏は、地元で代用教員を勤めた後、主婦として生活する中で、この傑作を書き上げました。水俣病で苦しむ人々の住まいを訪れ、取材した証言の記録なのですが、まるで被害者の魂がのり移ったかのような語り口は、鬼気迫ものがあります。執筆に使われたつつましい書齋のたたずまいにも、こころを打たれます。

【書名】完全版 宗教なき時代を生きるために

【著者】森岡正博

【発行】法蔵館

森岡正博氏は20代で遭遇したオウム真理教事件に衝撃を受け、自らのこころの構造や暴力性に向き合いながら、科学でも宗教でもない第3の道を模索していくしかないと決意した書として、本書を紹介されています。私も宗教を信じ切ることができず、さりとて生きていく上で生じる諸問題を科学でのみ解決できるとは思えず、苦悩した若き日々を経験しています。同じような困難を抱えている方には、一読をお勧めしたい作品です。一連の事件で元死刑囚13人全員の刑が執行された2018年にまえがきを、2019年にあとがきを追加した、完全版が再刊されています。

【書名】ガラス玉遊戯

【著者】ヘルマン・ヘッセ（渡辺勝 訳）

【発行】臨川書店（ヘルマン・ヘッセ全集 第15巻）

10代前半はヘッセに傾倒していました。文庫で買えるものは、全て読みました。もちろん内容は理解できないことが多く、特に『ガラス玉演技』（高橋健二訳、新潮文庫）は難解でした。この小説を理解できるようになるために学問したいと、当時考えていたように思います。2005年から日本ヘルマン・ヘッセ友の会研究会による新訳全集が刊行され、30年あまりの時を経て再読する幸せに包まれました。私の学問は未だ浅薄ですが、10代前半よりは前進していると思われます。ヘッセは死の直前までライフ・ワークである詩作に取り組んでいたそうです。作家の生き方に憧れて作品を読み込むのが、私の

読書スタイルのようです。新訳の方が読みやすいと思いますので、こちらを推薦します。

【書名】白痴

【著者】 フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー（亀山郁夫 訳）

【発行】 光文社（光文社古典新約文庫）

ドストエフスキーは30代で読み込み、飼猫にアレクセイ、ドミートリイ、グルーシェンカ（『カラマーゾフの兄弟』の登場人物）と名付けるほど、好きになりました。『白痴』は、有名な『カラマーゾフの兄弟』と同様、たいへん複雑な愛憎劇なのですが、私のこころに残るのはレフ・ニコラエヴィチ・ムイシュキン公爵の澄み渡る善良さです。不思議なことに、この小説を読んでいると、登場人物たちがすぐ脇で立ち居、語らっているような幻覚にとらわれました。当時、何かの病気ではないかと心配したくらいです。このような体験をする小説には、他に未だ出会っていません。